

## 半井桃水作品研究：初期新聞小説を中心に

金, 裕美

<https://hdl.handle.net/2324/4784379>

---

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏 名 : 金裕美

論 文 名 : 半井桃水作品研究—初期新聞小説を中心に—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、半井桃水（一八六〇—一九二六）の新聞小説を対象とし、従来の研究で看過されてきた半井桃水の新新聞小説、その中でも初期の新聞小説について考察することにある。樋口一様の恋慕の対象として知られている半井桃水は、明治から大正にかけて、朝日新聞社に勤務しながら、記者・小説家として活躍している。桃水に対する日本文学研究における評価は、樋口一葉研究に付随する要素として捉えられがちであった。言い換えれば、小説家・半井桃水は独立した研究対象として取り扱われてこなかったといえる。一般的な読書対象としても、現在では忘れ去られた作家であり、彼の作品はもはや読まれてすらいない。しかしながら、長期間にわたって新聞小説家として活躍できたことは、桃水の作品が当時の同時代読者に読まれ続けた証である。その要因を探るためには、桃水の新新聞小説の特徴を総体的に捉えることが必要になる。こうした問題意識から本論文が目指すのは、新聞小説作家としての〈半井桃水作品の特徴〉という問題の設定であり、それを桃水の初期新聞小説を中心に検討し、明治中期の新聞小説の実態について具体的なモデルを提示することである。

以下、各章の内容を簡潔にまとめる。

序章では、問題設定の背景や意義、先行研究について整理している。

第一章では、半井桃水の伝記事項を取り上げる。最初に桃水の生涯を整理し、大新聞と小新聞がそれぞれの試行錯誤をしながら発展している状況下で、海外特派員の生活を終えて桃水が東京に戻ってきたことなどを確認する。そうした状況下で桃水は新聞小説家として新たな一步を踏み出す。その際に、新聞界をめぐる状況の一面で、桃水が新聞小説家になった経緯について、桃水自身の経済的側面という個人的な事情も絡んでいることを検討している。

第二章では、「啞聾子」を取り上げる。「啞聾子」は桃水が『東京朝日新聞』入社後、初めて新聞紙に連載した作品である。新聞記者として「書く能力」があったとしても、新聞小説を連載することは別の次元の問題である。そういう意味では、「啞聾子」は桃水の新新聞小説家としての能力を試される作品といえる。そこで主人公という設定に注目し、岸辺捨吉が「啞聾子」と偽った目的とその経緯をまず検討している。ところで、「啞聾子」において桃水本人が作品内に登場するのは三カ所ある。そこで桃水が小説内に登場することで得られる効果について検討している。

第三章では、「くされ縁」を取り上げる。「くされ縁」は代々にわたる悪縁についての物語で二部構成となっている。第一部は清吉と芸者琴治の恋と二人の悪縁について語られ、第二部では盛一とお蔭の結ばれない恋と因縁について語られている。まず、分析の手がかりをもとめて、「くされ縁」の縁起を確認する。第一部の登場人物の因縁と第二部の因縁の関係性を中心に因縁の拡大と結末を考察することで、男女関係を中心として展開する「くされ縁」の構造を分析する。次に二部構成がもつ意味について探る。前作「啞聾子」の連載回数（三一回）と比較すると、「くされ縁」は五三回で、約二倍に近い連載回数である。第二作目でいきなり連載回数が増加するのは、桃水にとってそ

れなりの負担があったと思われるが、「くされ縁」の二部構成について新聞社側の変化という面から関連性を検討する。

第四章では、「海王丸」を取り上げる。「海王丸」において船の沈没という素材は、最も重要な要素の一つであることに注目する。「海王丸」の下敷きになっている出来事を明らかにしたうえで、連載時期との関係性について検討する。明治期日本における海難事故・事件のなかで最も世間を騒がしたのは、一八八六年のノルマントン号事件である。ノルマントン号事件をめぐっての新聞報道に基づいて、同事件が同時社会全般に大きな影響を与えたことを確認する。本章では「海王丸」とノルマントン号事件を比較分析することで、共通点と相違点を確認し、作品における受容の様相を考察する。

第五章では、「夢」を取り上げる。「夢」は、野生児である主人公ジギスムンドがどのように人間社会への復帰を果たすのかという物語的な小説であるが、当時の桃水が健康状態を悪化させ病院に入院する出来事があった点に注目し、その経験から「夢」の執筆を考察する。そうした私的体験を物語化する方法として夢がうまく利用されている。従来 of 桃水小説には典型的設定がいくつか存在するが、「夢」には既存の桃水小説でみられない特徴がいくつかある。「夢」は表面的には〈現実〉と〈夢〉、〈動物〉と〈人間〉という対立関係が成り立つことを論じた。

第六章では、「胡砂吹く風」の「はしかき」末部で『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』が言及されていることに注目し、「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』および『鶏林医事』とを比較し、その摂取や受容について検討する。その上で、作中の個々の場面の作意や解釈について検討している。

第七章では、「胡砂吹く風」の登場人物の設定のあり方について論じる。「胡砂吹く風」は多様な読みが可能な作品である。そのひとつの要因として、登場人物の設定における「同時代」の反映が挙げられる。幕末に薩摩藩士の父と朝鮮貴族の子女であった母の間に生まれた主人公が、維新後に日本と朝鮮を往来しながら戦闘や恋愛などの挿話を綴っていく展開において、作中に登場する人物設定や文脈上での意義などについて同時代的な背景から検討し、明治中期の日朝間に関する同時代的な言説や史実の反映を指摘している。

終章では、本論各章の内容を確認しつつ全体を整理した上で、新聞小説作家としての桃水の再評価の視点および今後の検討課題について提示している。末尾に参考文献一覧を付している。